|  |
| --- |
| 気づいてくれてよかった |
| 気づいてほしい |

その明くる日もごんは、くりを持って、兵十の家へ出かけました。兵十は物置でなわをなっていました。それでごんは、うら口から、こっそり中へ入りました。
　そのとき兵十は、ふと顔を上げました。と、きつねが家の中へ入ったではありませんか。こないだうなぎをぬすみやがった、あのごんぎつねめが、またいたずらをしに来たな。
　「ようし。」
　兵十は、立ち上がって、納屋（なや）にかけてある火なわじゅうを取って、火薬をつめました。
　そして足音をしのばせて近よって、今、戸口を出ようとするごんを、ドンとうちました。ごんはばたりとたおれました。兵十はかけよってきました。家の中を見ると、土間にくりが固めて置いてあるのが目につきました。
「おや。」と、兵十はびっくりしてごんに目を落としました。
「ごん、お前だったのか。いつもくりをくれたのは。」
　ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなづきました。
　兵十は、火なわじゅうをばたりと取り落としました。青いけむりが、まだつつ口から細く出ていました。